

むかし、あるところに、貧しい夫婦がありました。男の子ばかり子どもが五人いました。名前は、親指太郎、人さし指太郎、中指太郎、薬指太郎、小指太郎といいました。ある晩のこと、お父さんとお母さんは、食べる物が少なくなったので、子どもたちを山へ捨てようと相談しました。末っ子の小指太郎は、この話をこっそり聞いてしまいました。

「ぼくたち子どもを捨てに行くんだな」と、小指太郎は思いました。

朝になると、お父さんが、子どもたちに朝ご飯を食べさせてから、

「みんなで山へ行こう」といいました。兄さんたちは大喜びしました。けれども、小指太郎は、昨夜の話を聞いていたので、歩きながら木の枝を折っては、道の曲がり角に置いて行きました。

山の奥まで行つて遊んでいると、いつのまにかお父さんがいなくなっていました。兄さんたちは、

「たいへんなことになったぞ。お父さんがいない。どうしたらいいだろう」といって、とほうに暮れました。すると、小指太郎が、

「ぼくが帰る道を知っているから、心配いらないよ」といいました。そして、兄さんたちの先に立って、木の枝を置いた場所をたどりたどりして、家に帰りました。家に着くと、お父さんもお母さんもびつくりしました。

次の日、また山へ行くことになりました。小指太郎は、今度はごまを持って行つて、歩きながら少しずつ落としていきました。

山の奥まで行つて遊んでいると、また、お父さんがいなくなりました。そこで、子どもたちは、ごまのあとをたどつて帰ろうとしました。ところが、ごまは、鳥がつついたのか、ありが引いて行つたのか、ひとつぶも残っていませんでした。

帰る道が分からなくて歩きまわっているうちに、日が暮れてしまいました。

「どうしよう」

子どもたちは泣き出しました。けれども、小指太郎は、

「心配しないでいいよ」といって、あたりで一番高い木に登りました。見わたすと、遠くに、お城のような家が一軒見ええました。

「むこうに家があるから、あそこで泊^とめてもらおう」

みんなは、その家に向かいました。

戸をたたくと、男の人が出て来たので、みんなは、

「道に迷ったんです。どうかひと晩泊めてください」とたのみました。男の人は、

「どうぞ、どうぞ、いいですよ」といって、家の中に入れてくれました。

その家には、男の子が五人いました。寝るときになると、その子たちは、白い帽子^{ぼうし}をかぶって寝床に入りました。小指太郎たちは、赤い帽子をかぶせられました。

やがて、家じゅうが眠りこみました。小指太郎だけは、眠れませんでした。小指太

郎は、自分たちがかぶっている赤い帽子をとって、五人の男の子たちにかぶせました。

そして、男の子たちのかぶっていた白い帽子を、自分たちの頭にかぶせました。

夜中になると、男の人が、

「うまそうな子どもたち、みんな寝たかい」といって、きらきら光る刀を持って入って来ました。小指太郎がふとんの中からのぞいてみると、男の人は、人食い鬼^{おに}になっていました。鬼は、帽子が取りかえられていることに気づかないで、赤い帽子をかぶっている頭を切り落としました。そして、満足して部屋から出て行きました。

小指太郎は、兄さんたちを起こして、

「さあ、早く逃げよう、もう夜が明ける」といいました。みんなで、どんどん走って逃げていくうちに、夜が明けてきました。そこで、ほら穴^{あな}の中に飛びこんでかくれました。

朝になって、鬼が、子どもたちの寝床に行ってみると、自分の子どもたちの頭が切り落とされていました。鬼はすぐさま、どこへでも行きたい所へ行ける宝ぐつをはきました。そして、

「小指太郎の所へ行け」といいました。鬼は、あつという間にほら穴の入り口に着きました。

「あいつらはこの中だな。ごちそうになる前にひと眠りするか」といって、鬼は、ほら穴の前に横になって、眠りこんでしまいました。

小指太郎は、こっそりほら穴から出て来て、寝ている鬼の宝ぐつをそっと脱がしました。そして、宝ぐつをはくと、五人で手をつないでさげびました。

「鬼の宝のある所へ行け」

みんなは、あつというまに鬼の家の宝蔵^{たからぐら}に着きました。そこで、てんでに宝をかつぐと、

また手をつないで、今度は、

「ぼくたちの家に連れて行け」といいました。

みんなは、あつというまに、家に着きました。鬼の宝を持って帰って来たので、お父さんもお母さんも、大喜びしました。それから、みんなで幸せに暮らしましたとさ。
にや、がっさ

村上郁再話

資料『久永ナオマツ嬢の昔話』山下欣一・有馬英子編／日本放送出版協会